

アフリカの人々と名付け 23

名付けをめぐる国家の論理、個人の論理

小馬 徹

アフリカの現在と単系出自理論

人間集団には、強く個人を拘束するものもあれば、個人にかなりの自由を許すものもある。そのあり方は区々様々で、集団や社会を構成する組織原理の問題に属する。ただし、我々が知っている人間集団とは、それが内部において生きられたものでない限りは、誰かによって把握され、叙述されたものであり、対象を把握する理論が介在している。

単系出自理論は、ヨーロッパ人には容易に理解が及ばなかったアフリカの「支配者なき社会」、即ち無頭的で平等なアフリカの伝統社会の組織原理を理解すべく社会人類学が創り出した理論である。私は、何号か前の記事で、この理論をある程度相対化するべきだと述べた。特に、グローバリゼーションが進む現代の世界状況においては、この観点からアフリカの諸社会を理解する事が重要になる。

もちろん、ソマリアでは、単系出自理論に沿って政治的構造を理解できなかった事が米軍の無残な失敗を招いたと言えよう。依然として、父系リネージュ毎に組織された軍事集団が各地に割拠して、抗争し合っているからだ。だが、ソマリアは、現在でも単系出自原理が強く排他的な組織原理として生き続けている例外的な地域だと考えるのがふさわしい。

この意味では、私自身、これまでは個人の側よりもむしろ集団の側により強く則して、名前の社会・文化的な意味を「理論」として把握しようとしていたと言えるかも知れない。

気軽に名前を変える

ナイジェリアとニジェールにまたがって住むハウサの人々の間では、「久しぶりに再会

して友人の名前がガラリと変わっていたり、近所のはな垂れ小僧が出世魚のように次々と名前を換える」事を経験するという〔松下周二「西アフリカ・ハウサ族の名づけ」『月刊言語』19(3), 1990〕。

私自身、ケニアのキブシギスの人々の間で似た経験をした。例えば、既に紹介した渾名を自称とした二人の男性や、突然キリスト教名を名乗った老女の例がそれである。また、知り合いの女性が外国人のお気に入りの名前をミドル・ネームのように使い始めた時には、暫くはそれが彼女だとは気付かなかった。逆に、私の調査助手だった一人の若者は、アフリカ人としての意識に目覚め、キリスト教名を捨て去った。別の助手は、例外的ながら、父親の二つの名に因む二つの父称 (Patronym, 「××の子」という名前) を人間関係に応じて巧みに使い分けて、私を驚かせた。

国民国家以前の個人名

近代の国民国家が成立し、国際関係全般がそれを枠組みとして組織されるようになる以前は、個人の名前はどこでもかなり可変的だっただろう。通時的にはもちろん、共時的にも、状況に応じて個人は様々に呼ばれていたからだ。アフリカでは特にその傾向が強い。

現代の日本では、少なくとも正式には、個人は姓の他に唯一の個人名 (個人名, autonym) を持つだけだが、藩制期以前、個人は幾つもの名前を持っていた。通例、幼名、元服後の仮名 (「呼び名」)、実名 (「名乗り」)、字 (男性) または雅名 (女性) の4つの名前を持ち、他に渾名や職名、^{おくりな} 論 もあった。更に、趣味に応じて、しかもどのジャンルでも複数の号

を持つのが常だった。明治になっても実情は急には変わらず、柳田国男や折口信夫らの文筆名は20、30を超える。実際、余りにも多すぎて、研究者でも同定が煩わしい。

既に詳しく見た通り、アフリカでも出生状況を記録する名、祖霊名、牛名、詩名など、個人は同時に多くの名を持っている。加えて、父称や「××の父〔母〕」という子称 (teknonym) など、ある親族を基準にその人との関係を表現する呼称が多用され、会話の状況と対人関係に応じて使い分けられている。

ところでジャワでは、成長段階や、巡礼の旅から帰った後など社会的地位の上昇に伴って社会的な立場が変化する都度、気軽に名前が変えられる。人類学者ピーコックによると、この事実は、個人のアイデンティティの連続性よりも、むしろ一つの状況で自分が占めている社会的な立場と自分自身とを適切に釣り合わせる事の方にジャワ人が大きな関心を抱いているからだと言う [Peacock, J., *The Anthropological Lens*, 1986]。

これは前近代的社会における個人の名前の通時的な一側面だが、上の日本やアフリカの事例は、共時的な次元でも全く同じような変異が見られる事を教えてくれる。こうした事実は、西欧近代的な自己の概念を普遍的な前提とする考察に反省を促さずにはいない。

国民国家と個人の名付け

本連載の18回目では、アフリカの新しい「国民国家」の内部で生まれた諸々の新しい権威や地位を保持したいと人々が考え始めた時に、伝統的な命名法が大きく変化し、その行く手に苗字の観念が徐々に形成されて来ると述べた。だが、新たな政治的枠組みへの、人々の自生的で創造的な対応が名付け慣行の緩やかな変化を導く以前に、国民国家に内在する全く別の理論がそれを強く要請する事の方が、現実には多いだろうと思われる。

日本は、明治になると急速に国民国家の体裁を整え、国際政治の場で遅れを取るまいと腐心した。近代的な軍隊と産業を整え、西欧的な学校教育を導入する。そして、庶民にも苗字と唯一の名前の組み合わせで個人名を表記させた。従来全国各地でばらばらに行われていた個人登録制度を統一した戸籍法が制定されたのは、明治3年(1871)である。

言語の統一も図られた。明治政府は、明治19年(1887)から言文一致を企て、同33年(1920)には「国語」を成立させた[北村淳子「台湾の日本語教育が内地の国語教育に及ぼした影響」『国際文化研究紀要』(横浜市立大学)1, 1995]。また、「文学も国家の観点から見れば、軍隊と並ぶ国家的整備の一つであることを、新興国家の例は教えてくれる」

[田中克彦『言語からみた民族と国家』、1978]。一方、二葉亭四迷が言文一致体による『浮雲』を刊行したのが明治19-21年であり、人々の主体的な動きも見落とせないだろう。

ところで、言語学者松下周二は、個人の名前が時代と共に変化して行く現実を直視して、ハウサ人の名付けに関する「リラックスしたシステムも、やれパスポートだの、やれコンピューターに登録するのだといった、お上の圧力で、いつかねじまげられてしまうのでしょう」と述べている[松下、前掲書]。そして、「姓」のようなある程度不変な名前が欠如している故に、ハウサ社会をコンピュータ化しようとしたら、えらい騒ぎになりそうです[松下、前掲書]と言い添える。

植民地化と独立を重要な契機として、アフリカ各地でも明治日本と相同的な現象が進行した。現代の脈絡では、松下が指摘する電腦化も無視できない。姓や苗字の観念は、錯綜する現実の中でアフリカに導入されて来たのである。次回はその実情を少し立ち入って見てみよう。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)